

Hop Step Jump

14

初任者研修第 12 回
授業づくり⑥アンケートより

今回のテーマは『言語活動の充実と学習評価について』。講師の先生は、岡山大学大学院教育学研究科准教授 浮田真弓先生でした。当初予定していた先生の都合がつかなくなり、急遽、無理をお願いして来ていただきました。浮田先生は小学校国語科の教科書編集委員や、独立行政法人教員研修センターでも言語活動指導者養成研修の講師などもおつとめです。

何年仕事をしていても、その都度求められることも違うし、立場も変わってくるから不安になる。だから、何が自分ではできるか考え、学び、出来ることはどんどんやっていく！という、いくつになっても学び続ける力の大切さ、必要性をひしひしと感じました。子どもたちに、主体性のある人になってもらう為にも、自分自身、いろいろなことに好奇心や学ぼうとする意欲を持続していこう！と思いました。

子どもたちの言語能力を高めるには、まず教員自ら言語能力を高めていくことが必要なのだと思います。言語活動ができる場面を提供し、一人一人の生徒を見て、どのようなところでつまづいているのかと、一人一人の様子をチェックし足りないものを補って、フォローなどをしながら進めていくことも大事なことだと思います。なかなか時間が足りなくなったりして、言語活動の場面を与えにくくなるときもありますが、言語活動を取り入れながら上手に授業を進めていけるようにがんばりたいと思います。

教師が一番の学び手となり、好奇心を持って様々に学ぼうとする姿は子どもたちの手本になります。また学ぶ場として、教室の言語環境を整えることはとても重要です。今回の研修でも難しい言葉が出てきましたが、子どもたちが授業で学んだ教科の用語を用いて議論するように、教師同士も教育の専門家として教育の用語を用いて議論したいものです。

浮田先生のお話を聞いていると、早く子どもたちに会って実践してみたいと思える時間でした。学習計画表については、指導者にとっても一つ一つの授業での目標がはっきり見えるし、子どもたちにとっては、1つの教材で自分たちがどんなことを学んで最終的に自分たちはどんな姿に成長するのか見通せるとともに、振り返りもできるということの有効的だと知りました。読書においても「毎日コース」として宿題を出していたけれど、読み込むと子どもも飽きてしまっていたから並行読書として取り入れることで読書の楽しさを感じるとともに、言語活動を取り入れることになり、友だちと交流する楽しさも感じられると知ったので、すぐに実践したいと思いました。

言語活動の充実について、1・2学期の実践を思い出しながら、話を聞かせていただきました。2学期に「ウナギのなぞを追って」をしました。その中で、年表を使って説明文をまとめ、分け、筆者の気持ちを考えていきました。毎回ふりかえりを書き、グループ活動をし、とても子どもたちの書く量も増えたのを実感しました。単元のまとめとして、ウナギの紹介文を筆者の工夫をマネしながら書きました。そして3学期、1/2成人式に向け自分自身の説明文を書く活動につなげようと学年で考えています。「とにかく書かせる」ではなく、『目的』をもって書かせる。その『目的』とは何か、自分も子どもたちも把握することが大切だと思います。

目的を持って読む、書く。子どもたちが「読みたい！」「伝えたい！」と本気になる仕掛けが大切です。そのためにも先生がつくった素敵な見本があると勢いづきます。図書館司書の皆さんとそのネットワークもとても頼もしい味方です。

交流の前提についてで、ついつい「同調」させることを目的としてしまっていました。しかし、同調だけでなく「世の中には違いがある」ということの発見につながる様な課題設定が大切だと聴き、考えを改めることが出来ました。話し合いの文化を育成するためにも、どんな人の話もちちゃんと聴き、何を言っても大丈夫という雰囲気づくりの学級を目指します。学習指導要領をもう一度見直します。

みんな違うところからの協働。これからの社会で求められる力です。違うからこそ気が付き、深まることがあります。子どもたちの学力差に困難を感じている先生も多いですが、解決の糸口はここにあるのではないのでしょうか。

今回は2・3年目の先生方も希望により受講いただきました。年明け早々にも関わらず、特に午後の部では、100 人を超える参加となり、皆さんの意欲的な姿を見て、私たちも気持ちが引き締まりました。ありがとうございました。